

保育者養成校における保育実習指導を考える

—2015年度～2018年度の保育実習評価及び自己評価—

Examining childcare training guidance in childcare teacher training schools

—Childcare training evaluation and self-evaluation from FY2015 to FY2018—

岡田 真智子 Machiko Okada
(愛知学泉短期大学幼児教育学科)

抄 録

本稿では、幼児教育学科における保育実習指導Ⅰ・Ⅱにおいて、2015年度～2018年度にかけて保育実習Ⅰ・Ⅱの実習評価結果を基に保育実習指導の在り方を検討し進めてきた。すなわち、1年時の実習評価結果を翌年の保育実習指導Ⅱに活かし事前指導をしてきたことが学生の実習評価に反映できているのかどうかを検証したものである。結果として、実習評価基準は各園の実習担当者の主観により左右されるものであるが、そこでの学生の実習に対する評価を客観的に評価していると検証材料とした。また、同様に実習後の学生の自己評価と比較することで、実習現場において学生の実習に対する取り組み方、実習態度を見ることにもなり具体的な指導に活用できると考えるに至った。他に、2018年度の学生に対して保育実習指導Ⅰ・Ⅱについてのアンケート調査を行い実習事前指導に対する評価結果を見ることで、おおむね学生の立場からは満足のいく指導であったものの、学生を取り巻く社会、生活環境の大きな変化の中において、実習評価に反映できる保育実習事前指導の在り方を保育現場と協働し保育者育成に活用できるものにしていくことで、養成校卒業後、保育現場で実践力のある保育者育成に結び付ける。

キーワード

保育実習Ⅰ・Ⅱ
保育実習評価
保育実習指導
自己評価

目 次

- 1 はじめに
- 2 保育実習Ⅰ・Ⅱの実習評価（2015年度～2018年度）
- 3 実習評価と学生の自己評価の比較と課題
- 4 保育実習後の自己評価（2018年度学生）
- 5 2年生後期終了時に保育実習指導Ⅰ・Ⅱに対するアンケート調査
- 6 今後の実習指導の課題
- 7 まとめ

1 はじめに

高校卒業し保育者の道を選び入学、資格を取るための専門科目を学び幼稚園教諭免許Ⅱ種、保育士資

格を取得するためには5つの実習は欠かせないものである。中学生・高校生時代に子どもと接する体験学習を通し、子どもがかわいい、子どもと遊ぶこと

は好きと入学してきても、6月教育実習Ⅰ後、体験学習とは異なり、幼児教育者になるための課題にぶつかり、戸惑いを見せる学生が目立つ。教育実習Ⅰは5、6名のグループで、附属幼稚園での5日間の実習である。しかし、保育実習Ⅰは、1年生授業終了後、ほとんどの学生は各園一人で2週間の保育実習Ⅰを行うことになる。学生生活と保育現場では大きく異なり不安がつきものである。保育実習指導はそれまでに保育園の施設に対しての知識、幼児理解、保育者の職務等指導し、又実践できる児童文化財の指導を行うことで、できるだけ保育者の職務、子ども理解に全力を注ぐことができるようにしている。しかし、現場において実習担当保育士、年長者、保護者とのコミュニケーションの壁やそれに伴い生活経験の少なさは不安の要因ともなっており、事前指導が実習評価につながっているとは言えない状況である。そこで、2015年度～2018年度までの学生の実習評価から実習指導の在り方を振り返り、現場での実習評価と学生の自己評価との違いや実習指導に対するアンケート結果から今後の実習指導を考えることとした。

1.1 保育実習指導Ⅰ・Ⅱの概要等

科目の概要は、保育実習に当たり、その心構えや具体的な知識を含めたオリエンテーション、保育現場で求められる実技指導、実習園に行く前の事前指導と実習中の巡回教員からの指導、実習後の個別指導などから構成されている。進級、保育士資格取得の必修科目となっている。事前指導の学習内容としては①実習の意義と目的を理解できるようにする。②実習の内容を理解し、自らの課題を考える。③実習施設における子どもの人権と最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務について学ぶ。④実習の計画、実践、観察、記録、評価の方法や内容について具体的に学ぶ。⑤実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い、新たな課題を明確にする。¹⁾

1.2 保育実習Ⅰの概要等

この科目では、保育現場での実習を通し、保育所の役割・子どもの理解、保育現場の環境構成等に実際にかかわることで理解を深める。また、これまでに学んできたことを実践の場で自らも試みを含め確認することで、自身の到達点や保育者としての特性を学ぶ。また、保育者に必要な専門知識・技能を現

場において協調性をもって変わることができるように学ぶ。内容としては、①保育所の役割や機能を具体的に理解する。②観察や子供とのかかわりを通して子ども理解を深める。③概習の教科内容を踏まえ、子どもの保育及び保護者への支援について学ぶ。④保育の計画、実践、観察、記録及び自己評価などを具体的に学ぶ。⑤保育士の業務内容や職業倫理について学ぶ。²⁾

1.3 保育実習Ⅱの概要等

この学外実習は、実習最後として2週間にわたり行う。この科目は、保育実習Ⅰと同様に、現場での実習を通して、保育者の役割、子どもの動きの実践的位階、保育現場での環境構成に触れることを目的とするが、保育実習Ⅰと異なる点は、実習指導案を作成し研究保育を行い理解する。今まで学んできたことを実践の場で、自らの試みを含めて確認することになり、自分自身の理解の到達点や保育者の特性を見る重要な機会として、位置付けている。保育士に必要な専門知識、技能を保育現場で協調性をもって柔軟に活用する。また、学習内容は①概習の強化や保育実習Ⅰの経験を踏まえ、子どもの観察や関りの視点を明確にする。②保育の計画、実践、観察、記録、および自己評価等について理解する。③保育現場での実習を通し、保育者の役割、子どもの動きや実践的理解、保育現場の環境構成や職業倫理観について理解する。⑤保育士としての自己課題を見つける。³⁾

1.4 実習評価とは

実習終了後に実習施設から送られてくる評価票のことであり、保育実習における各園での保育実習担当者による評価である。評価票の取り扱い、および保育実習や保育実習指導に係る評定の算定については、実習施設の評価格差により評定が算出することはなく、学生の成績評価にかかる責任は、あくまでも実習担当者による評価とし、実習先からの評価は実習指導と精査している。

1.5 自己評価とは

保育実習指導の事後指導としての意味を持ち、実習巡回担当教員とその実習生によるグループワークによる実習の振り返りが行われる。また参加する際には自己評価票を完成させての参加となっている。

2 保育実習 I・II の評価（2015 年度～2018 年度）

2015 年度～2018 年度学生の保育実習 I と保育実習 II の実習評価結果は項目が違うため比較できないが、保育実習 I の結果から保育実習指導 II に向けて課題を見出すことができる。

表 1 保育実習 I 評価票の評価指標項目

| |
|--------------------|
| 1 保育所の機能と役割の理解について |
| 2 子ども理解について |
| 3 保育内容と環境構成 |
| 4 保育の計画、観察、記録 |
| 5 保育士としての役割と職業倫理 |

表 2 保育実習 II 評価票の評価指標項目

| |
|------------------------|
| 1 保育者の役割や機能の具体的展開 |
| 2 観察に基づく保育理解 |
| 3 子どもの保育及び保護者との連携 |
| 4 指導計画の作成、実践、観察、記録、評価 |
| 5 保育士の業務と倫理観及び自己課題の明確化 |

2.2 2016 年度学生の保育実習評価

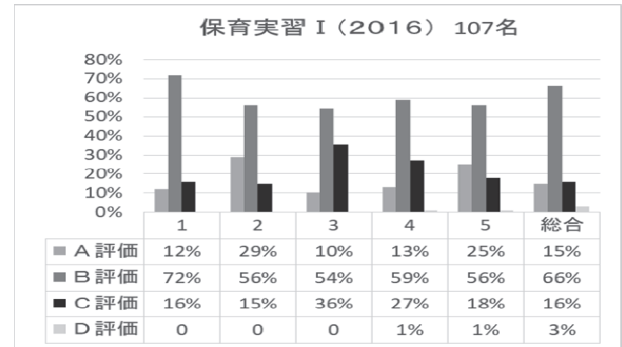


図 3 保育実習 I (2016)

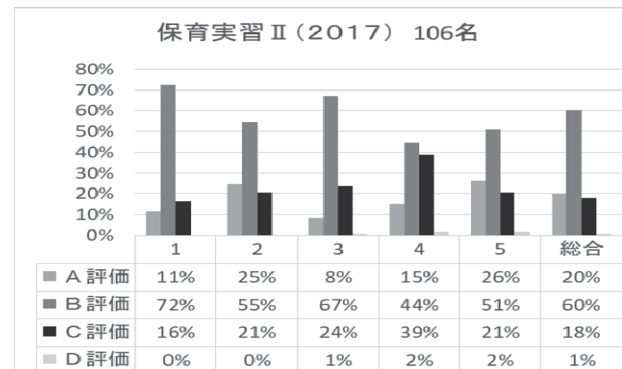


図 4 保育実習 II (2017)

2.1 2015 年度学生の保育実習評価

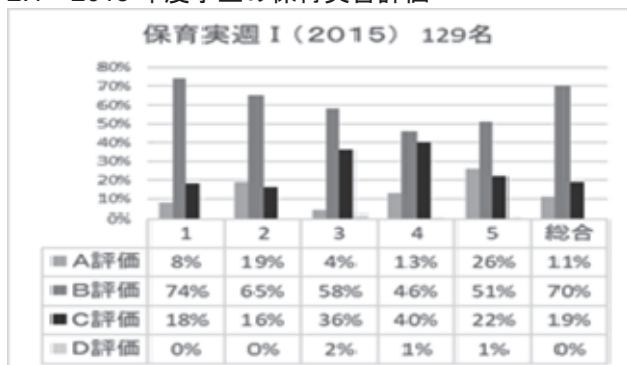


図 1 保育実習 I (2015)

2.3 2017 年度学生の保育実習評価

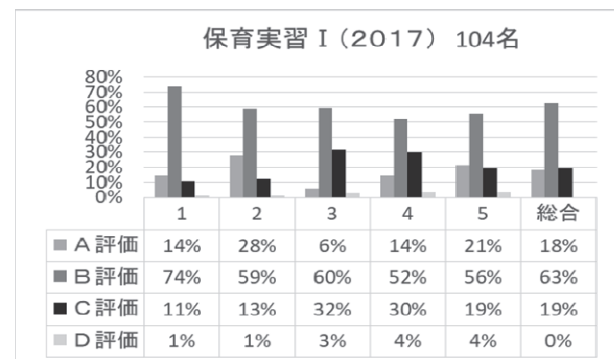


図 5 保育実習 I (2017)

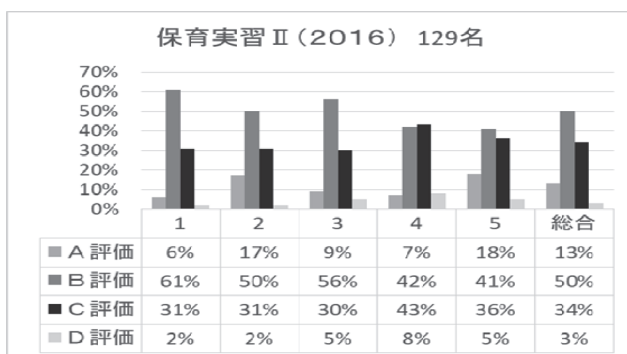


図 2 保育実習 II (2016)

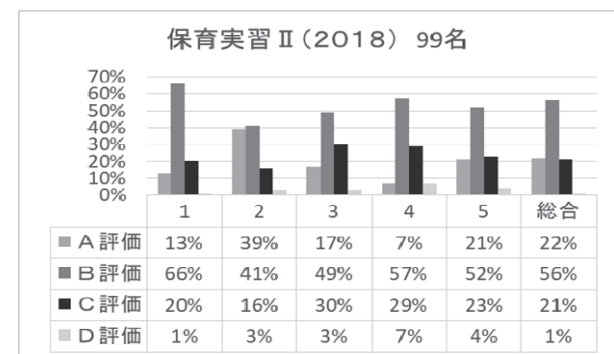


図 6 保育実習 II (2018)

2.4 2018年度学生の保育実習評価

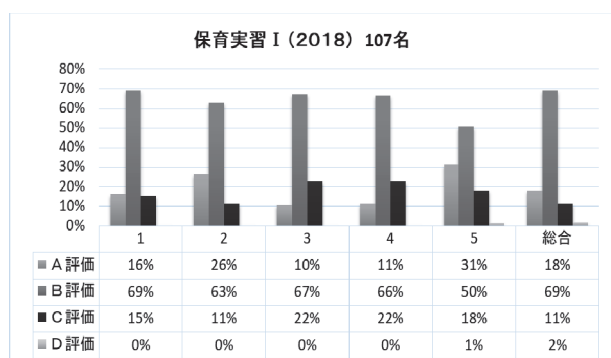


図 7 保育実習 I (2018)

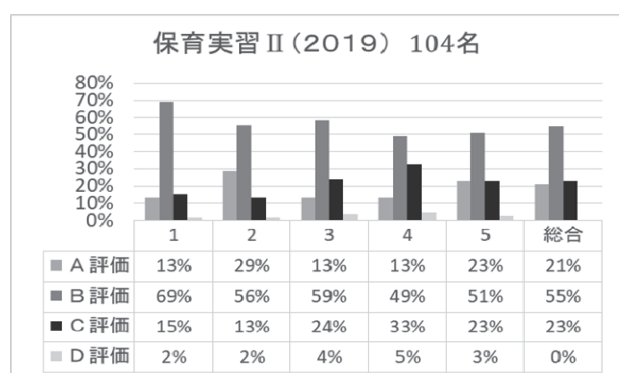


図 8 保育実習 II (2019)

2.5 2015年～2019年までの保育実習指導の流れ

2014年までは実習指導の中で実習ノート作成が課題であった「手遊び・絵本・季節の歌」について実習前に自身で選曲し作成することになっていたが取り組みには個人差が見られた。

2015年になり実践力を付けるためとして、手遊びノートとの作成を課題とし、一人1曲持ち寄り各クラス全員のものを1冊のノートとしてまとめ実習前に持たせ、活用状況を把握できるように手遊び実践シートを作成、実習後提出させ集計し検討した。(2015年第68回(中部ブロック)日本保育学会において口頭発表D3保育内容I(保育内容総論・遊び)3)

2016年では、手遊びノートの実践活用シートを提出し手遊びの実践をする学生が多くなってきた。また、各クラス単位で手遊びノートにまとめたものをクラスで一人ひとり前にて実践することにより、クラス全員の手遊びを知る機会となり実習において実践活動に結び付けることができた。

2017年では、園児の前で自信をもって演じることができるようパネルシアターボードを制作し、簡

単なパネルシアターを作成し、クラスにおいて実践課題とし実践を行った。

2018年では、パネルシアターは簡単なお話を作ることから始めたが、戸惑う学生が多いため手遊びや歌をもとに制作することをアドバイスし、それらを持ち実習に対して自信をもって園児の前で実演し積極的に取り組むことができるようにした。

2019年には、パネルボードを使い自己紹介をテーマにしたパネルシアターを作成、園児との最初の出会いが学生に対して親しみを感じてもらえるような取り組みを提供した。実習目標や部分実習のための指導計画作成、実習後のお礼状等の指導に力を入れたことにより、実習評価につながっていくと考え実習指導を行った。

2.6 実習評価結果の考察

保育実習 I と II の総合を比較して見えてきたのは保育実習 I では A 評価が低く保育実習 II では A が増加するが B、C 評価が増えている。全体的にみると保育実習 I において A、B 評価が高く、保育実習 II では B、C 評価が多い。保育実習の評価は就職にもつながるものであることから、保育実習 I の評価結果を学生に返し、保育実習 II の課題として学生自身の弱みを強みにするための個別指導強化を図る必要性が見えてきた。

3 保育実習事後 I・II 自己評価 (2018年度学生) 保育実習事後指導時の自己評価結果

表 3 2018年度2年生保育実習 II の自己評価票

| |
|---------------------------------|
| 1 子どもたちに積極的にとけ込む姿勢 |
| 2 クラスや園全体などに細かく注意を払う(気配り)をする姿勢 |
| 3 礼儀、挨拶、言葉使い、身だしなみなどのマナーの姿勢 |
| 4 笑顔、明るさ、声の大きさ、活発さなど保育者としての基本姿勢 |
| 5 いろいろなことに対して、積極的に実習、研究する態度 |
| 6 実習ノートの作成と内容の具体的記述 |
| 7 部分実習・研究保育への取り組み |
| 8 今回の実習全体に対する自分の取り組み姿勢 |

以上の項目について4段階評価で行う

3.1 2018年度入学生1年生の保育実習Ⅰの自己評価結果

表4 2018年度学生による保育実習Ⅰの自己評価集計

| | よくできた | できた | ややできなかった | できなかった | 回答数 |
|----|-------|-----|----------|--------|-----|
| 1 | 61% | 38% | 1% | 0% | 107 |
| 2 | 20% | 72% | 8% | 0% | 107 |
| 3 | 43% | 53% | 4% | 0% | 107 |
| 4 | 51% | 44% | 5% | 0% | 107 |
| 5 | 29% | 60% | 10% | 1% | 107 |
| 6 | 14% | 75% | 10% | 1% | 107 |
| 7 | 24% | 49% | 17% | 10% | 107 |
| 8 | 0% | 0% | 0% | 0% | 107 |
| 平均 | 30% | 49% | 7% | 1% | 107 |

3.2 2018年度学生の2年生保育実習Ⅱの自己評価 1年次では107名であったが休学等で105名

表5 2018年度学生の保育実習Ⅱの自己評価集計

| | よくできた | できた | ややできなかった | できなかった | 回答数 |
|----|-------|-------|----------|--------|-----|
| 1 | 50% | 46% | 4% | 0% | 105 |
| 2 | 16% | 73% | 10% | 0% | 105 |
| 3 | 40% | 56% | 4% | 0% | 105 |
| 4 | 33% | 57% | 10% | 0% | 105 |
| 5 | 23% | 61% | 14% | 2% | 105 |
| 6 | 10% | 65% | 25% | 1% | 105 |
| 7 | 22% | 56% | 21% | 1% | 105 |
| 8 | 25% | 70% | 5% | 0% | 105 |
| 平均 | 27.3% | 60.5% | 11.6% | 0.5% | 105 |

4 考察と課題

2018年度学生の保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの実習評価と自己評価を考察し今後の課題を探る

4.1 保育現場での評価

1年次における保育実習Ⅰの実習評価〔図1.3.5.7〕は初めての実習ということで全体的に見て80%以上の学生がA・B評価をいただいている。しかし、保育実習Ⅱの実習評価〔図2.4.6.8〕では、

将来保育士となって同僚として一緒になって働くという視点が加味され必然的に厳しく考えられ、78%と少し低い結果となっており、C・Dの割合が高くなる。特に、〔表2〕の4にある「指導計画の作成、実践、観察、記録、評価」に対する割合が目立つ。保育の現場において実践力を必要としておりそのために観察力を発揮し子どもの姿を捉えその成長を見据えての指導計画作成が重視されていると考える。

4.2 1年次・2年次の自己評価

学生自身の自己評価は実習評価と項目が違っているものの、「よくできた」「できた」の項目を合わせて保育実習Ⅰ〔表4〕では平均79%を占め、保育実習Ⅱ〔表5〕では87.8%と高くなっている。これは1年生ではよくわからないまま2週間が終わったという感覚で、2年生となり保育実習Ⅱをやり遂げた達成感を感じ満足している結果ではないかと考える。また、〔表4〕の項目6を見ると、1年次では上位2項目を合わせると89%もあり保育実習Ⅱでは75%と下がっている。保育実習Ⅱの実習課題である研究保育、1日実習があることで学生にとっての負担感の現れかと推察できる。

4.3 現場と学生との意識のずれ

意識のずれを大きく感じる点は見られないが、往々にして学生による自己評価は高めであると感じる。それは、園から提出された実習評価票を学生の必要に応じて提示すると、多くの学生は「なんで低いの」一斉に帰ってくる。自分はいくやっと思ったことは、より意欲につながることであり良い効果があるが、低い結果では次の実習に対する意欲低下につながることも考えられる。その場合はできるだけ、良い結果を認めつつ、次に対して意欲の持てる援助を考え対応にあたる。

4.4 学生の学び（成長）にむけて

2017年度までは実習評価票を学生の要請に応じて提示していたが、2018年度からは保育実習Ⅰの結果を提示し事故課題を待たせるようにして保育実習Ⅱに向けて指導をしている。自己を見つめ、自己課題を見出し次に向かう目的意識を持ち実習に臨むように指導した。できるという自信のある学生、私はできないという学生とさまざまではあるが、一人ひとりに向き合い、その学生の強み、弱みを一緒に見出し弱点を強みにするために考えてサポートすることで実践力

を持った学生育成につながると考え実行した。

5 実習関係の授業を終え事前事後指導に対するアンケート調査と考察

2015年度から2018年度までの4年間の学生の保育実習評価から保育実習指導を考えてきた。それについての評価を2018年度の2年生を対象に保育実習を振り返り実習指導についてのアンケート調査を行った。

5.1 アンケート調査の項目とその結果

表6 アンケートの5段階評価項目

| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---------|-----------|---------|---------|-------|
| 当てはまらない | やや当てはまらない | どちらでもない | やや当てはまる | 当てはまる |

表7 保育実習事前事後指導についての質問項目

| |
|----------------|
| 1 授業の内容は理解できた |
| 2 時間配分は適切だった |
| 3 進み方はちょうどよかった |
| 4 聞き取りやすかった |
| 5 主体的に参加できた |

表8 保育実習事前事後指導についての集計結果

| | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
|----|------|----|-----|-----|-----|
| 1 | 0% | 1% | 10% | 52% | 37% |
| 2 | 0% | 4% | 19% | 48% | 29% |
| 3 | 0% | 1% | 19% | 49% | 31% |
| 4 | 1% | 2% | 20% | 42% | 34% |
| 5 | 0% | 4% | 13% | 42% | 40% |
| 平均 | 0.2% | 2% | 16% | 46% | 34% |

表9 児童文化等の実践活動についての質問事項

| |
|----------------------------|
| 1 パネルボード作りは良かった |
| 2 パネルシアター制作は良かった |
| 3 ぶらぶら人形制作は良かった |
| 4 パネルシアターの発表が良かった |
| 5 ぶらぶら人形を使用してグループでの発表が良かった |

表10 児童文化活用財活用の実践活動についての集計結果

| | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
|----|----|------|-------|-------|-------|
| 1 | 0% | 0% | 20% | 46% | 34% |
| 2 | 0% | 0% | 24% | 43% | 32% |
| 3 | 0% | 4% | 16% | 46% | 34% |
| 4 | 0% | 6% | 31% | 48% | 16% |
| 5 | 0% | 7% | 26% | 46% | 22% |
| 平均 | 0% | 3.4% | 23.4% | 45.8% | 27.6% |

表11 授業内容についての質問項目

| |
|--------------------|
| 1 実習で役立つものであった |
| 2 積極的に参加できた |
| 3 指導や助言のタイミングが良かった |
| 4 将来現場で役立つものであった |
| 5 授業以外においても進んで学習した |

表12 授業内容についての集計結果

| | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
|----|------|------|-------|-------|-------|
| 1 | 0% | 1% | 9% | 40% | 50% |
| 2 | 0% | 1% | 13% | 47% | 39% |
| 3 | 0% | 2% | 22% | 53% | 22% |
| 4 | 0% | 1% | 10% | 48% | 41% |
| 5 | 1% | 7% | 32% | 42% | 18% |
| 平均 | 0.2% | 2.0% | 17.2% | 46.0% | 41.6% |

表13 保育実習における目標等についての質問項目

| |
|---|
| 1 保育実習の意義と目的を理解した |
| 2 実習の内容を理解し、自らの課題を明確に持つことができた |
| 3 子どもの人権と最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務の重要性を理解した |
| 4 保育の計画、実践、観察、記録、評価内容の理解した |
| 5 実習後自己評価を行い新たな課題を明確にすることができた |

表14 保育実習における目標等についての集計結果

| | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
|----|----|------|-------|-------|-------|
| 1 | 0% | 1% | 18% | 56% | 26% |
| 2 | 0% | 1% | 18% | 48% | 33% |
| 3 | 0% | 1% | 12% | 29% | 58% |
| 4 | 0% | 0% | 14% | 50% | 36% |
| 5 | 0% | 0% | 12% | 50% | 38% |
| 平均 | 0% | 0.6% | 14.8% | 46.7% | 38.2% |

5.2 アンケート調査の結果とその評価

保育実習指導についていろいろ考えてシラバスを作成し指導を行ってきたことの対し、学生の評価結果をみる。〔表 7.9.11.13〕の質問項目について「⑤あてはまる」の最低は18%であるが最高値は58%、「④やや当てはまる」を加えると76%の学生が指導については高評価である。していることがわかる。しかし、どちらでもないとする学生や当てはまらないほうの結果を選ぶ学生もいることに対し、今後きめ細やかな指導特に個別指導に力を入れていく必要を感じる。

6 これからの保育実習指導

今までの結果から見えてきたこと及び、今後の課題について考える。

6.1 保育実習指導について

過去の分析から見えてきたことは生活経験の少ない学生にとり保育園での保育実習は日常生活を集団でどのように取り組んでいけばよいのかが問われる。保育者としての専門性は一般家庭における日常生活ではなく、専門的知識を持ち、あらゆる場面で想像力を働かせ、耳を澄まし子どもの声からその思いを把握し、子どもの行動からその子の未来を見据えて援助していくものである。日常生活に対しての専門知識を待ち、感性を持って対応することが求められる。生活文化水準が上がり、手をかざせば水が出る、動かなくても掃除をしてくれる、雑巾を使う機会が減り、ウエットシートで対応する。便利な生活を過ごしてきた学生に、保育園での実習はできないことばかりであろう。

まずは、園での生活のDVD視聴を通し、実態を把握、時系列を順に保育者としては具体的にどのように動き、活動するかを考えることから始めるようにする必要があると考え、2019年度の保育実習指導がスタートした。

今までに高評価であった児童文化材活用の実践指導や保育内容に関連した教科とも相互に連携を取りながら進めていく必要がある。教職員同士の連携を今まで以上に取っていくことで、実習指導と関連付けていくようにすることも重要である。

実習は実社会であり、そこでの人とのコミュニケーションの取り方については日頃より挨拶、言葉使い等TPOを考え、正しく使用することを自覚させ

て行く必要がある。実習担当者のみならず将来の保育者としての自覚を意識させ、立ち振る舞いに気を配ることができるように教職員全員で指導していく。

6.2 一般社団法人全国保育士養成協議会

一般社団法人全国保育士養成協議会編集の「ミニマムスタンダード」は2007（平成19）年に発表されたが時代状況の変化、養成校側での実習指導に対する改革を踏まえ、改定版というより新たな流れを打ち出した「保育実習指導のミニマムスタンダード Ver.2『協働』する保育士養成」が発刊された。ここでは、第1部実習指導の意義とミニマムスタンダード策定の意義を示し、第II部のSTEP3で保育実習の具体的内容について述べ、第III部では課題、目指す方向（専門委員会報告を基に）、第IV部においては養成校への期待、連携からなっている。全国の養成校での共通認識を持ちそれぞれで活用できるものであり、今後実習指導に対し活用を探るようにする。

6.3 保育現場での評価

実習巡回時には担当教員と実習担当保育者で実習学生に状況について話し合う時間を設けている。忙しい中でも一人ひとりの学生に対しての検討をすることができる貴重な時間である。また、実習指導に対しての意見や、今時の学生・保育者の姿、求められる保育者の資質など聞き出す機会にもなっている。それらを持ち帰り学科会議において報告会が行われているが、今後より深めたものになるようにできるだけ多くの時間をかけていくようにしたい。また、実習指導担当者との連絡会などの機会を作ることができれば、より一層保育者の専門性を高めた学生の育ちにつながると考える。

7 まとめ

2015年から2018年までの4年間の実習評価をデータにまとめ分析、保育実習Ⅰの評価をもとに保育実習指導Ⅱに活用し、また、前年度の評価を保育実習事前指導Ⅰに活用してきた。しかし、実習は教育実習。施設実習と5回の実習が課せられておりそれらすべて連動している。それらを鑑み2019年度の教育実習Ⅰの評価をもとに時間外の特別指導を立ち上げた。学生の弱点である発信力、表現力、感性の乏しさ、近年SNS等で言葉による伝え合いや、文

章力の低下により、園からの評価では誤字、脱字、文章が書けないなどの指摘を受け、リテラシー（文章表現）、コンピテンシー（行動特性として言葉と身体表現）の向上を図るために教育実習担当者が動き出したところである。

また近年一般社団法人全国保育士要請協議会編集の保育実習の「保育実習指導のミニマムスタンダード Ver.2『協働』する保育士養成」では保育実習について現場の保育実習指導者との協働が叫ばれている。保育現場と協働の重要性をあげており、養成校として保育現場と協働し、より良い保育者育成を進めていく。

見て「できた・できない」、「うまくいった・いかない」、「評価してもらえた・もらえなかった」といった単純な二分法的な評価基準・判断ではなく、学生自身が実習全体として自から考えたことや実習での言動、態度、子どもとの関わり等について、しっかりと振り返りながら自己評価、および反省・省察・改善を行い、次の実習に繋げていくことが、保育実習に取り組むためには必要な態度であることを理解させ、本学の4大精神である真心・努力・奉仕・感謝をもち社会人基礎力の学びを発揮し保育実習に取り組む姿勢を意識させることが保育実習指導に必要である。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、本学幼児教育学科研究助手の野々山香織様、石川泰子様より多大なるご尽力をいただきました。ここに記して御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 愛知学泉短期大学 syllabus2019 幼児教育学科 P329
- 2) 愛知学泉短期大学 syllabus2019 幼児教育学科 P337
- 3) 愛知学泉短期大学 syllabus2019 幼児教育学科 P341

参考文献

- 1) 愛知学泉短期大学 幼児教育学科 編集・発行：学外実習の手引—幼稚園・保育所・福祉施設実習—〔2019年度改定版〕(2019)
- 2) 一般社団法人全国保育士要請協議会編集：「保育実習指導のミニマムスタンダード Ver.2『協働』する保育士養成」・中央法規出版社(2018)

(原稿受理年月日：2020年1月15日)